

鷺見文庫書誌覚書(上) : 廉斎書留より(二)

白石, 良夫

<https://doi.org/10.15017/4742020>

出版情報 : 雅俗. 13, pp.42-53, 2014-07-15. 雅俗の会
バージョン :
権利関係 : 著作権保護のため論文中の図は非表示



鷺見文庫書誌覚書（上）

——廉斎書留より（二）

白石 良夫

大学院を出たばかりのころ、中野三敏先生に執筆を任された明治書院和歌大辞典の項目リストのなかに、「四十八番歌合（本居宣長判）」というのがあって、九大文学部所蔵と註記されていた。

文学部には同書名・同内容の本が二部あり、一方は貴重書、一方は普通書扱いであるが、ともに「国文・5」のラベルが貼られたものであった。該書には、宣長が判者になって催した歌合五篇が収められていたが、うち二篇は、当時刊行されて間もない本居宣長全集に収録されていた。さっそく宣長の新出資料と銘打って、入会したばかりの西日本国語国文学会で報告（昭和五三年九月）、『語文研究』四七号（同五四年六月）に解説篇を、『江戸時代文学誌』創刊号（同五五年一二月）に翻刻篇を執筆した。わたしの宣長に関する最初の業績であった。のち、この新出歌合は全集補遺篇に収められた。

「国文・5」のラベルが貼られて、国語国文の書庫の一角に配架されている約三〇〇冊の和本が、鳥取藩士鷺見家伝来の資料であることは、容易に知られた。そして、丁寧に書き記された識語から、それらの多くが鷺見安歎（天明四〜弘化四年）が伴信友の蔵書を借用して書写したものであることが知れた。そのことがわたしの興味をかきたてた。返却の機会を逸したのか、信友の有名な「コノフミヲカリテヨム

ヒトアラムニハ／ヨミハテ、トクカヘシタマヘヤ」「身後俟代我珍藏人伴信友記」の蔵書印のある本もあった。

廊下を隔てた国語国文研究室の書庫は、当時まだ開放されていて入り自由だった。時間を見つけて九大に出掛けてゆき、書庫の窓際のテーブルで、函架番号の順に、識語類を中心に書誌をノートにとっていた。勤めのあいまを縫っての作業であるから捗らなかつたが、東京に転出する前に、「国文・5」の書架にある分の調査は終えることができた。

あとまわしにした別置の貴重書は数部調査しただけで、大半は残したままになった。が、貴重書は国文学研究資料館が撮影していったと聞き、かえって東京で利用しやすくなるというので、未練なく九州を離れた。もつとも、東京では資料館詣でのまとまった時間がとれず、またわたしにとって喫緊の研究対象でもなかつたので、そのままになってしまつて九州に舞い戻ってきた次第。

本稿は、三十数年前のノート「廉斎書留」（廉斎は白石の号）をひっくり返して、ここにそれをそのまま公開するものである。

ところで、鷺見家伝来のこのコレクションについて、文庫形成という観点からの研究に、近年、田村隆氏の「鷺見文庫点描」（九州大学

附属図書館研究開発室年報』二〇〇八―二〇〇九年）がある。文庫の概要、九大に購入された経緯、鳥取と東洋大学の鷺見家資料などに關して詳述される。幸いにも田村氏の関心とわたしのそれとは異なっており、それを奇貨として本稿を草してみようという気を起こした。感謝する次第である。田村氏稿には教えられることが多いが、そこに書かれていない、鷺見文庫と鷺見安歌の、おそらくわたし独自であろう情報をお知らせする。

九大文学部の鷺見文庫を使った先行研究が、前掲のわたしの学会発表と解説と翻刻、それと和歌大辞典の項目「四十八番歌合」である。というのは手前味噌であるが、おそらくわたし以前にこの鷺見文庫をまとめて閲覧したのは、大鹿久義氏であつたらう。大鹿氏の「伴信友著撰書目稿」（伴信友全集別巻所収）は、九大の鷺見安歌書写本に調査が及んでいる。

鷺見安歌に関するまとまった資料としては、碧沖洞叢書『近世歌人書簡集』第二冊所収の安歌宛伴信友書簡三八通があつて、書物の貸借や古典校合に関する記事が多くみられる。書簡中には当然、九大鷺見文庫本に該当する記述があちこちに散見する。同人宛伴信近書簡二通も附されていて、それによって信友逝去後の事情が察しられる。また、大鹿氏編『伴信友來翰集』『稿本伴信友書翰集』にも資料が収められている。

碧沖洞叢書所収の信友書簡の所蔵者山本嘉将氏の蔵書（稲葉文庫）は、現在、東洋大学の有に帰す。稲葉文庫のことは田村氏の報告するところであるが、信友書簡については触れていない。

山本嘉将氏所蔵の書簡の多くは、弥富破摩雄氏から譲られたもので

ある。ということは、山本氏だったか弥富氏だったかの書いた文章で読んだ記憶がある。国文学研究資料館マイクロ資料に稲葉文庫書簡の一部があり、それに弥富氏の蔵書印の捺されているものがあつた、これも戸越時代の資料館で目撃した記憶がある。弥富破摩雄氏については、国会図書館の『参考書誌研究』六四号（平成一八年三月）に上田由紀美氏稿「国立国会図書館所蔵弥富破摩雄旧蔵書目録——中島広足自筆本・手沢本類の宝庫」があり、国文学研究資料集成第五卷（平成二〇年、クレス出版）に鈴木亮氏稿の略伝が載る。

鷺見文庫書誌

各資料内のもつとも新しい年記をその資料の成立時と見なして、その順に配列した。年記のないものは一括して次回の最後に廻した。引用文中の二行割書あるいは小字などは、ポイントを下げて一行にした。引用文は通読の便を考慮して濁点を附し、句読点のかわりに一字スペースを空けた。

虫損などによって読めない箇所は□□で示した。

①貝つくし百首 「国文・5・114」

半紙本、写本、一冊。外題「貝つくし百首」。

作者は、千蔭・いさ子・のゑ子・ひさの・はる子・やえ子・まつ子・知芳尼・あつよし・雨岡・なを子・兼備・きよ子・慎庸・てらす・由定・つた子・さへ子・とえ子・かう子・りき子・ほの子・かつみ・あさ子・正留。

識語、

寛政十一年未七月廿二日八代洲河岸の邸中にてうつす

鷺見

やすあきら

②秋の名残 「国文・5・41」

大本、写本、一冊。外題「秋乃名残 全」。

一丁オモテに左の序文。推敲あり。左は推敲後の形。

鈴屋大人の御もとにふづきの末つかた田鶴屋翁を中人たて、なづき奉れるほど 秋の末に世をなむすぎたまひけるはかなしといふはさら也 かくてかのうしのをしへ子のためにあげつらひたまへりしことゞもを見聞につけて此さうしに

かきつめてかたみとは見む長月の秋廼名残の千々の言の葉

享和三年三月 伴信友

内容は、伴信友が入門を果たさないうちに宣長が没したのを嘆き、師と敬慕する宣長の以下の遺文などを集めたもの。

○鈴屋答問録（前半）

朱の書入れ（信友説）多し。識語（二三丁ウラ〜二四丁オモテ）、

右鈴屋答問録一冊 大平所藏書ヲ以天明八年十月廿八日写畢

村田並木

〈千楯本コノ次ニ九ケ条ノ問答アリ 末ニウツシ記セリ〉

享和二年十一月廿二日夜燈下写畢

墨附二拾捌葉

伴信友

〈文化元年五月以城戸千楯本朱校畢

信友

全二年六月以平田篤胤本朱校

（〜内は朱書）

流布本『鈴屋答問録』の後半部を欠く。「千楯本云々」はそのことをいう。三三〜四三丁に補う（後述）。

○家号之弁

○ウヂカバネノ弁

○大祓詞白人古久美之考

○本末ノ歌（宣長）

識語（二八丁オモテ）、

是は佐藤正木がもてるかけものにして 大人の自筆のかけものをかりて書うつしぬ 信友

○鈴屋大人の肖像を写したるの由縁（信友）

その全文を掲げる。ただし、推敲甚だしく、左は推敲後の形のみ残す。

鈴屋大人の肖像を写したるの由縁

大人の六十歳ばかりのころとかや 自らの像をゑがきおかんとおもひおこして をりをり鏡にむかひて物し給ひけるが 月日へて書うつしをへ給ひぬ それがうへに 師木島の倭心を人とはば朝日にはふ山桜花 とかきおき給ひけるとぞ かくて弟子たちの中に又 そのかたを書て得させ給へとこひけれどもむつかしとてうけひやレ給はず さらばうつさせてんといへば世の絵師と称ふものになか、せそ 筆のいきほひにまかせてまたくうつしえし たゞその道になづまぬまめくしき人にうつさせよかしと つねのたまひけるとなむ 吾学友村田並木は大人の弟子なるが かの像をしかしてうつさせたる やがてみづから筆とりて かのかたをかきて置給ヘルナリとていつきもてるをかりてこたび藤林誠繼にあとらへてうつさせえたり さて大人は去年の秋の末月身まかり給ひ□□なれば弟子として其家つげる大平ぬしのもとに並木が松坂へものせるついで書てよ

□こと□□を書てよとくりてこひければ やがてまたかのう
たを書てぞおくり返されける いとよくうつしえたりと大平主
もいはれし 並木がかへりてかたりけり 今おのれがかけもの
としていはひもてるはこれなり

享和二年十一月廿九日 信友

○鈴屋翁拜神式

その冒頭（二九丁ウラ）、

…鈴屋翁拜神式

享和三年十一月大平翁ノ許へ鈴屋大人ノ拜神ノ式ヲ問ニ遣タル
ニ書付テ答ラレタル趣ヲコ、ニ記

・毎朝拜神式（朱ノ分ハ大人ノ子息ナドノ幼年ノトキ略シテ
ヲガマレ候分也 本文ノ通りニ御写シ可然候
大平）……（後略）……

その文末（三二丁オモテ・ウラ）、

コハ三十年ホド以前大人ノ拜ノ式ヲタツネツルトキニ書付ミセ
ラレケルヲ 大平ウツシオキタル也 拍子ニツト記サレタレド
ソレハ始ノホド大人若年ノ事也 後ニハ大人老年両方ノ手ヲ同ジ
ヤウニ合シテ四ツウタレ候 音ハ甚ヒキクウタレ候 ○世ノ人
ニ異ナルコトヲ見セテワレハガホニコトトククスルコトハ 大
人ノ甚キラヒ ……（中略）…… 大平

信友君

マタ手簡中ニ

神ヲ拜スル式ノコト 故翁ノ拜セラレ候神名ウツシ指上申候
故翁モ毎々申サレ候 此事ハ吾心ニテスル事ニテ 翁ガスル

マ、ニセムハイカッ也 手本ニハナリガタシトイハレ候ヘドモ
松坂社中ハマヅく此式ニ從ヒ居候云々 大平

州五郎様

○鈴屋答問録（つづき）

その冒頭（三三丁オモテ）、

最前ニ村田並木翁ノ本モテ写オキタリシ答問録ハ在番ノ条マデ
ナルヲ 京人城戸千楯本ニハカハ在番ノ末ニ九ヶ条ノ答問アリ
文化元年四月京へ行タルトキ千楯ニ借りテカノ九ヶ条ヲウツシ
ソフ 伴信友云

識語（四三丁ウラ）、

以上文元年四月廿一日写功成就 墨附十四枚

〈文化二年以平田篤胤本一校 无異全 信友〉

○五部書説弁ノ中宝基本記弁上

識語（四九丁オモテ・ウラ）、

右五部書説弁ハ元文中吉見幸和風水翁ト云ノ弁書也 其ウチ宝
基本記弁上中下 御鎮座伝記弁上ノ卷々ヲ村田並木ノ既クウツ
シモタリシヲ 鈴屋翁ノカリテ見玉ヒケルニ 其弁ノウチニハ
甚ク古意ニタガヒテ中々ニ道ニ害アル説ノアルヲ見スグシ玉ヒ
難キ処ハタ然ラヌ処ヲモ ヲリくハナホ論ヒナホシ玉ヒテミ
ヅカラ押紙ニ書付テカヘサレタル本ナリトテ並木翁ノ見セラレ
タル ソノ押紙ノヲチくヲコ、ニウツシトメツルナリ 今
ヨリ後イトマアラバ カノ説弁ヲモウツシトリテナホ引アハセ
テヨク見ルベキ也 イハユル五部書トハ 宝基本記 御鎮座伝
記 御鎮座次第記 御鎮座本記 倭姫命世記ナリ 文化元年十

二月九日夜墨附六枚ニウツシトリヲヘツ 信友書

③ 鷺見保明遺稿（仮題）〔国文・5・67〕

横本、写本、一冊、共紙表紙仮綴。表紙中央に「遺稿」、左下隅に「鷺見」とあり。安歌が父保明の遺詠をまとめたもの。

本文巻頭（二丁オモテ）、

春部 鷺見休明遺稿

一丁オモテ・ウラの凡例、

一 父君の生まし、は寛延の二とせといふ年にて 歌よみ始られしは十五といふ齡の冬よりのことなれば ここに書あつめたるは宝曆十まり三とせといふとしをはじめにて 寛政の五とせといふとしまでの間の年の序にはよらずて 四の時 賀 かなしみ 恋 雑と書あつめつ 寛政六とせといふ年より文化四年までは後編にあつめつべくなん

一 此まきにしるしたるは伯耆国米子の大城のもとに住ませるほどの也 後編は仰ごともて鳥取の大城のもとに移られしよりの也
一 年わかきほどより村瀬鎖榮によりて歌のてがら問聞玉へれど鄙の国べにしあればとりたてたる歌もなく たゞ折にふれ事につけつ、朝夕に思ふまゝをよみ出玉へるをまめやかに書おくれたるなれば 今又わがよしあしえらみぬべきならねばありのまに／＼書あつめつ

一 安藤先生とは父君の漢学びの師にて 名章 号は箕山 因幡鳥取の人なり 歌にはし書にかけけるがおほければかくしるしおくになむ

④ 関市令義解 〔国文・5・12〕

大本、写本、一冊。外題、書題簽、

関市令義解 附倉庫令缺文／医疾令缺文 全 令義解附卷也板本

右の三部を合写合綴。朱書入れあり。

「関市令」巻頭上欄空白に朱筆で、

関市令 尾張人神村正鄰考訂本最好校 白本綴収本篇可見 信友記

「関市令」末尾、

明和丁亥正月 阿波美馬郡人源元寛（曾我部）謹校

本院家藏

一冊の最終丁オモテに、

尾張河村秀穎 補逸

河村秀根

益根校註

とあり、その左側に次のような識語あり。

世父楽寿庵先生類先訓 律庵先生惜_二倉庫医疾_二一篇闕逸不_レ伝

及_レ読_二政事要略_一知_二医疾粗存_一鈔出為_レ卷 又読_二令集解_一拾_二其

遺逸_一共納在_二篋底_一 今加_二校註_一以備_二遺亡_一 庶幾全篇遂出以

伝_二于後世_一 庚午暮春 益根識

最終丁ウラに墨筆で、

文化十歲次癸酉年十二月廿日借石井正敏藏本写得之 伴信友

その左に朱筆にて、

右二令以白文本比較之 白文本考説別記之 句説訓点共写之 信友又記

とある。さらに、

他日以交替式補

とある。

成詔

在原成詔は荒尾氏。

⑦百人一首改観抄 [国文・5・22] 契沖著

大本、写本、二冊。頭註・傍註(宣長説)多し。

凡例のあとの空白に、次の墨書入れあり。

宣長云 此抄ハ先達諸抄ノ説ト大ニ異ナル処多シ サレバ見ル者

多クハ疑テ信ゼズ シカレ共ヨクヨク味テコレヲ考ヘ古書ト

考合テ熟思スレバ 諸抄ノ及バザル優レタル説ノミ多シ

此抄ニ限ラズ契沖師ノ作ミナ然リ 見ム人ヨクヨク味フベキモノ

也 契沖師ノ説ハ証拠ナキコトヲバイハズ 他ノ説ハ多クハ証拠

ナシ

識語(最終丁ウラ)、

宝曆十年庚辰十月九日夜開席 予講談此抄 同年十二月夜終業

右頭書傍之内祢師云者先師加茂県主作此百首古説之義也 清

舜庵宣長

天明四年甲辰閏正月廿日夜再開講 同三月十日夜終業 以十之夜

為其期都六度而畢

寛政十年午三月六日夜再開 同月十六日夜終

識語(裏表紙ウラ)、

文化十四年丁丑五月日於東武赤阪邸写 入江智持

文末、

文化十とせあまりふたとせといふ年の神無月十日

在原朝臣

⑧雪舟禪師碑詞 [国文・5・86]

大本、写本、一冊、仮綴。

識語、

此書原本魯魚亥豕之類不尠 某易見者一二改訂之 猶疑者姑闕之

俟得善本之日也 文化乙亥仲秋念日 保喜識

⑥三鳥考 [国文・5・106]

大本、写本、一冊、仮綴。外題「三鳥考」(うちつけ書き)、内題「三

鳥考」。

序文、

三鳥考

ささくさの三鳥のことはとり／＼に鳥なみはるさかしらごとのみ

いできたるを くさかのたゞこえちのたゞしきに 百千鳥さへづ

る春は物事にあらたまることあらためておぼつかなき山中にま、

見るともがらを呼子鳥とよびたて、 いなおほせ鳥のうしろめた

き事難くときをしへ給はんとて物したまへるなも

衣川長秋

裏表紙ウラ、中央に、

文化十四年九月十七日

吉備津宮宮司長門守從五位下藤井宿祢高尚

⑨新古今和歌集「国文・5・24」

大本、刊本、二冊。刊記・奥付なし。

朱書入れあり。本文一丁オモテのノドに朱筆で識語、

朱もてかき入たる説どもは本居翁のいへる美濃の家づとのなり

略けるあるは原書をひらき見るべし 文政三年九月

歌識

⑩玉の屋会始の歌「国文・5・89」

横本、写本、一冊、仮綴。表紙中央「玉の屋会始の歌」、表紙右隅「文政四とせむ月廿六日」。内題「文政四年春玉之屋新室会始」。

跋文、

まささてひものや町のふる五百機の衣川大人の家 おとつ年の卯月に火結びの神のあらびにあひてやけずみと成にしを またあたらしく造りたてむと事はかりせられしが こぞの冬までにはものごとさらに造をへられたる ことし文政のよとせといふとしの月の廿日あまり六日のひに その新室の学びの屋の高楼に人々つどへて宴樂せられしをりの歌になむ おのれ足曳のやもひありて其まとゐにえ物せざりければ せめてはかきとめられし歌をだにとて見せられしをうつつしおくこそ

おなじむ月の廿まり九日といふ日 安歌

入集者は以下のとおり。荒尾左馬之助在原成詔・衣川宰記長秋・中村

八十八甫房・石河又太夫幽・加須屋平久武義・坪井善内貞利・木村和助常忠・城戸鍛藏正貫・木村隼馬常久・岡野平助貞利・佐治取右衛門長孝・阿毛元吉清顕・佐治七九郎正長・伊吹左伸文緒・松田又之進勝尚・馬淵市右□□文・財原甚右衛門清男・河尻甚兵衛重令・鷺見勘解由安歌・田中吉平以心・一行寺积淨阿・横田勇平華隣・田中寿庵章苗・市村源七篤行・小林鷲三郎茂・淵本和伸太武定・佐々木初之丞喜昌・藤田元仲安躬・半田屋半四郎正之・天野六郎右衛門寛懋・田代元春恒親・横田小藏保我良・沢郡右衛門恵根・三好吉十郎・笠田松之助惟成・小倉寿之助寿明。

⑪神樂催馬楽私論「国文・5・31」伴信友著

大本、写本、一冊。外題、表紙中央にうちつけがき、墨書「神樂催馬楽私論 草稿」。表紙左下隅に「信友」と墨書。朱書人、朱付箋あり。

一一丁オモテ・ウラの跋文、

おのれ楽の道はつゆまなびたる事なく さるかたの書どもうす
く見たる事もなく□□になき事ながら いまだ此事わかまへたる説をきかざるによりて おもふところありてかくまで論ひ試する也 これひがごと、さとることあらば□□□□やりすてなむ
文政五年年しはすの十三日 此ほどの雪にたれこめて硯の水の水れるを埋火にあた、めとかしつ、下書かき終へつ 伴信友

一二丁ウラ（最終丁）跋文、

文政五年未正月七日 己が聾小折喜道が奴 若狭の片田舎より去年の霜月出来る若人なるが 供待するほど近隣の人の唐楽ぶり

の横笛箏篳をあはせ吹を聞て酒打のみつ、かたるをきけば、きのふ或処に供まちして聞たる時のうなり声とあの吹ものとは同じ声なるをおもへば、あの吹もの、まねなんめり、あのやうなる事して何のたのしきことやあるとつぶやくを、喜道に昨日うなりたるものき、たりとは何事ならんといへば、しかくの処にて主人が催馬楽と郢曲をうたひたる事をいへる也と云ふに、おのれ手うちほとぼしりて、唐国にてなにがしとやらんが知音と云しふる事に似たりといへば、聾は何事ともこゝろえず、なでふことと□□□□

答へんものぐさくて、よそのことにまぎらかして打すぎたり、今かく下書せるに叶ひこゝろゆきておぼゆ、又未ノ六月隣にてある人の催馬楽うたふをよめをよびてきけといへば、これをき、て籥の譜とやらんを云なめりとして打わらひてにげ入りぬ、信友追加

⑫二種日記 「国文・5・110」

大本、写本、一冊。外題「二種日記香取・椿太詣合冊」。加藤千蔭『香取の日記』、村田春海『椿まうでの記』を合冊したもの。

「香取の日記」末尾「寛政六年五月」

「椿まうでの記」末尾「天明七年三月」
識語、

文政七年二月写畢 原本ハ板本也 鷺見蔵

⑬雅言集覽 「国文・5・1」 石川雅望編

半紙本。イゝカ部が刊本、ヨゝス部が写本。本居大平・賀茂季鷹など

の序文。袋あり、「石川雅望先生輯／雅言集覽初編／橘五園蔵」。写本識語、

右雅言集覽自与至寸部四十五卷 以作者草案転写本課諸人書写了
宛採用本書誤写不少 他日訂正可増補

文政九年丙戌正月 伴信友

⑭臣道 「国文・5・92」本居宣長著

大本、写本、一冊。

一丁ノ八丁、「或人の今の世にいにしへの道もて君につかへ国を治めむ心ばへはいかにあるべきと問ふにこたへさすと詞」と題した文章。本文末尾（八丁ウラ）に「本居宣長」と署名あり。

識語（八丁ウラ）、

右本居大平翁の本を借りて人におほせて写させつ、かくて此巻いまださだまりたる名なかりければ、今私に臣道とうはがきせり

文政九年六月十二日 伴信友

八丁ノ一四丁、「与谷川淡斎」と題した漢文尺牘。末尾に「乙酉八月明和二年也 本居舜庵」とあり。本居宣長全集第一七卷所収。

識語（一四丁ウラ）、

右本居大平翁就先師之遺藁反古中見得所写也云、今于茲得許借課人書写之一校了

文政九丙戌年六月十二日 伴信友

⑮旅の道くさ 「国文・5・113」鷺見安歌著

半紙本、写本、一冊、仮綴。表紙中央「旅の道くさ」、左下「安歌」。

内容は、文政九年の四度の旅行中の歌を記したものの。その冒頭、

去年の師走廿二日司たまはりてとみに大江戸に物せよとの仰ごと

か、ぶりければ 今年文政九年正月十一日鳥取を立いづ 吉成村

のこなたにて後をかへりみれば 家の園に生たる杉の梢見ゆ

第一度 一月一日〜一月二十九日、鳥取↓江戸

第二度 九月二〇日〜一〇月一三日、江戸↓鳥取

第三度 一月七日〜一月二五日、鳥取↓江戸

第四度 一月五日〜二月二四日、江戸↓鳥取

末尾に、

文政九とせといふ年の師走 鷺見安歌

とあり。

⑩源註拾遺 「国文・5・19」 契沖著

大本、写本、八冊。朱書入れあり。

識語、

明和二年乙酉四月二十六日書写終業 舜庵本居宣長花押^(マ)

文化十年癸酉自二月至四月詠人書写了同年九月校合 安田広

治(花押)

時々書加以朱筆者広治なり

文政十一年戊子五月以一本比較加書以青筆焉

広治

⑪碑文・祝詞・和文(仮題) 「国文・5・88」

大本、写本、一冊、仮綴。内容は以下のとおり。

①「福原東馬盛尚之碑」

②「為悪魔降伏祭須佐之男命祝詞」

③「須佐之男命大前」

④「奉詠須佐之男命歌三首」

⑤「奉詠菅公歌」

⑥「母刀自の八十の賀にある歌」

⑦「建部内匠頭殿にこたへまゐらする歌」

作者は、三丁オモテ①の末尾にある「源弘範撰」(神吉弘範)か。

朱書入れあり(本居大平筆)。最終丁ウラの本文の後に、朱筆の書付あり。

○シルシ付タル歌文スベテ清書シテオクリ玉へ サテ御流ニテイ

サ、カモ無理ハ見エネドモ 人ノ見テマドヒツベキ字体ハ心付テ

見アヤマツ アシク書テ玉へ 写シナドセンニハ大ニマドヒツベ

キサマ也 仮字ナド云モノ人ノ見テアヤマタヌサマニ物スベキコ

ト也 世ニコトヤウナラヌゾヨキ

文政十一年六月十二日見畢又 大平 (印)

⑩古学意をよまる歌ども 「国文・5・83」

大本、写本、一冊、仮綴。表紙中央に、「古学意をよまる歌ども」、内

題「古学意すとて心に思ひとれることどもを述る歌」。全一二三首。

七丁オモテの最後の歌の次に、

上件の歌どもはふるき世の書あるは鈴屋故大人のこれかれのしる

べふみどもを見もてゆく中に げにもと心に思ひとれることは

た今の世にかく心得をるぞよからんと思へることどもを其時々

よみおきたる也けり 玉銚百首のさまをまなびたれど かの如く

人にさとす為にはあらず わが思ひばかりのたらずして古学の意

にたがひたることもあらば □□ひつめばやとになむぞ有ける
もとより倭もろこしのざえなき身の 拙き詞もて述たるなれば
いはゆる道歌めきてうるさきも多く ことのこゝろわきがたきも
ありなむを 大直□神直毘に見直し聞直し給ひてをしへさとし給
ひねかし

鷺見安歌

藤垣内大人の御許に

八丁オモテウ九丁ウラ、宣長を褒め称えた文章あり。その末尾、

文政の十年余り一年といふ年の七月のころ

播磨国佐用郡平福村御民 神吉弘範

⑱竹取物語解 「国文・5・16」 田中大秀著

大本、刊本、六冊（首・一〜五）。外題・内題「竹取翁物語解」。内題
下「飛驒高山 田中大秀著」。序文本居大平（「文政十一年戊子十一月
朔日」）、跋文鈴木胤。奥付年記「天保二年辛卯初夏発兌」。版元、江戸
須原屋伊八・京植村藤右衛門・大坂河内屋喜兵衛・同河内屋太助・尾
州松屋善兵衛。

見返しに一枚摺の貼り紙あり。

今三年過て癸巳のとしは我師鈴屋翁の三十三年にあたり 故に
其年の春と秋とに御霊祭せんとす いでみやびをたち既読出給た
らむ花の御歌 月の御歌 題は何にても其我御心にかなひたらむ
をたにぞくに書給ひて 一ひら宛賜はらん 其祭に御像の前に読
上て御霊魂を慰参らせんとす 又彼翁の著されたる古事記伝につ
きて考出給へらむこと 彼の誤を論たまはんことなど侍らば書出

てみせ給ひなむ 追オヒツキカンガヘウケツミ考と題して取集て冊子となして彼書に添
て弘め侍りてん いかで癸巳のとしの春までに 猶其年月はおくれ
たりとも 賜はりたらんまに次出してんとす 便りにつけておくり給
はんことをこひのみ奉るになん あなかしこ

文政十三年庚申九月 飛驒荏野千種園主 田中大秀

文たまはらん便処は 尾張名古屋本町拾丁目松屋善兵衛 其た

よりよきより給はらん 表ウラぶみは 飛驒高山田中弥兵衛隠居

荏野翁の許に としるし給ひてよ

荏野社中執事

⑳読史竊述 「国文・5・108」 伴信友著

大本、写本、一冊。文末に「文政十年二月廿五日夜 めがねにうつし
て書をへぬ 信友」とあり。

識語、

天保二年十月 伴信友未校の稿本をかりてひそかに人におほせて

写し畢ぬ

追て改正の後猶書加べし

八代洲河岸の邸の旅居にて 鷺見安歌しるす

㉑鈴屋和歌会式 「国文・5・49」

大本、写本、一冊。外題には「鈴屋和歌会式 完」とあり。『鈴屋和歌
会式』と『永正聞書』の二書を合綴する。

○鈴屋和歌会式（墨付九丁）

内題「和歌会式」。

識語、

右和歌会式 森光保がもたる書をもて 故郷の旅のやどりにしてうつつしぬ

享和二年十一月廿八日 知 (花押)

右鈴屋和歌会式所用也ト云々

享和三年二月第辰□知崇におほせてうつつさせぬ 伴信

(花押)

○永正聞書 (墨付一丁半)

内題「永正聞書 永正日記ともいふ」。内題の左傍に朱筆で左の書入れあり。

本朱也

言□抄は冷泉家の弟子作れる所也といへども かはりめを証さんため たらざるを補はむ為に書入

奥の識語、

右於下野宇都宮以手録也 久左衛門藏本抄出之也

文政五年八月 信友

右伴氏信友之本をかり人におほせて写させつ

天保三年弥生 安歎

②あさがほ 「国文・5・36」伴信友著

大本、写本、一冊。本文末に「天保元年十月稿」とあり。内容は「あさがほ」の語義を記したものの。

識語、

こは伴信友翁の考てしるしおかれたるなり 猶添もし削もすべけ

れば人にな見せそといはれたれど おのれの物すべければとてしひて乞得てかく写しおきつるなり

天保三年 安歎

③瀛津島防人日記 「国文・5・56」青柳種信著

大本、写本、一冊。内題「瀛津嶋防人日記」、内題下署名「青柳種麻呂述」。

識語、

右筑前国福岡人青柳種麻呂字勝次日記也 以同所人岡崎勝海字文右衛門所写之本手写之 于時

文化十五戊寅年三月廿日 伴信友

此日記合卷一冊 借留伴氏之藏本使人写之 于時

天保四卯年五月十八日 驚見安歎

④までかたの考 「国文・5・112」城戸千楯著

半紙本、写本、一冊、仮綴。外題「左右手肩考」(うちつけ書き)。内題「までかたの考」。朱書入れあり(安歎)。

本文末尾、

天保三年七月しるす 城戸千楯

本文奥書、

までかたの事とひにやりし折 何くれとくはしくをしへ給ひて又後にこの考はめぐみ給ひたるになん

天保三年辰八月 大谷宣甫

識語 (墨筆)、

此一冊は 京都人紙魚室城戸千楯の許にその門人大谷文次郎宣甫
がまでかたの事をとひし時におくれるなりとぞ 良信法師につけ
ておのれに見せたるをかく写しおくものぞ

天保四年六月廿八日 安歎

識語（朱筆）、

因ニ云 此諸手肩ノ考ヨロシカルベシ サキニ瓊齋翁ノ鈴屋翁ノ
考トテ説聞セラレシモ同ジ趣ナリキ 高尚翁ノ考ハ顕昭ノ袖中抄
ノ説ニヨリテイハレシト思ハル サルヲ此書ニ袖中抄ノ説ヲ一ワ
タリ弁セザリシハ不審シクアカヌコ、チス

因幡伯耆ノ国人ノ俗言ニ フリカタグト云ハフリカタノ体言ヲ
用言ニイフ也 古今集俳諧歌ニ マタク心ヲハギニアケ云々ト
云ル マタグモマタグト云詞□ 股ヲ動カス意ヲコメタリト聞
ユ 雅言ニカタグト云ヘル例ヲオボエネド 同例ノ詞ツキ也
鬢^{カッラ}ヲハタラカシテカツラグトモ古クイヘルモ見エタリ 安

歎識

識語中「瓊齋」は衣川長秋。

(附記)

今回の再調査にあたっては、川平敏文氏に多大の便宜をはかっていたいただいた。

著作権保護のため図は非表示



「鈴屋大人の肖像を写したるの由縁」(②『秋の名残』所収)の一部